

震災伝承若者が決意

132人登録 10班でグループ討議



第2期開講式・第1回詳報

東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を旨とし、河北新報社などが運営する通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」の第2期が21日、開講した。



初日のグループワークでは震災から思い浮かぶキーワードを出し合い討議した＝仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパス

受講登録した大学生と社会人132人のうち90人が開講式に参加。主催する「311次世代塾推進協議会」会長の一力雅彦河北新報社社長は「1年間しっかり学び、次世代に震災を伝える語り部になってほしい」と激励した。受講生代表は「震災の経験と教訓を学び、災害に備える一人となりたい」と決意を述べた。

受講生は想定した定員50人を大幅に上回った。宮城県内の116人に加え、山形、東京、京都など県外からの参加者も16人いる。受講生からは「自分が何ができるか被災地の状況を知って考えたい」「震災の風化を防ぐため、自分の考えを持ち、伝える力を学びたい」など、意欲的に震災と向き合う言葉が相次いだ。

開講式後のグループワークでは、1班10人前後の10班に分かれ、震災から思い浮かぶキーワードを出し合いつつ班内で討議。各班で意見をまとめ、「被災直後と復興過程での人のつながりを学びたい」「何を伝えるか見極める力を付けたい」「震災を学び、知識を生かす方法を考える」などと誓いの言葉を述べた。



班ごとの発表を前に討議した内容をボードにまとめる受講生



東北以外に発信

視察もある講座で、被災地の現状を知りたいと思いつき参加した。初回から、津波被害や原発事故の被害に遭った受講生仲間から、報道されない深い部分の話を聞くことができました。東北以外の人に自然災害の恐ろしさを伝えられるよう学んでいきたいです。

(仙台市太白区・尚絅学院大2年・逸見彩絵さん・19歳)



防災リーダーに

教員志望なので防災教育に役立ちたいと思いました。多くの先生の中で、その分野のリーダーでありたいと思います。当時

の状況を学び、災害時の行動で何が最善か、学んだことをどう伝えるかを考え、災害に備える子どもを育てていきたい。

(仙台市若林区・宮城教育大3年・鈴木康太郎さん・20歳)



学びを深めたい

第1期の修了生です。宮城県南三陸町で漁業をしていた祖父母が津波で被害を受けたことが受講した動機の一つです。震災を知るだ

けでなく、学びを深めたいと考え、再受講を決めました。知見をさらに深め、学校の防災教育に役立てよう努めます。

(仙台市青葉区・宮城教育大4年・西村春香さん・22歳)



認識の溝埋める

関東出身で、大学進学のため仙台市にきました。震災の爪痕を感じたことはあまりなかったのですが、自分の見ている地域の様子と、

被災地宮城の現状にギャップがあるのではと思うようになりました。溝を埋めるため、震災について正しく学びたいと思います。

(仙台市太白区・東北大4年・齋田涼裕さん・21歳)



共感できる力を

大学職員として働いています。家庭で事情を抱える学生の中には、震災が影響している人も多く、被害の大きさを実感させられま

す。被災した人に共感できる力を身に付け、学生と保護者が安心して大学に通えるよう、支えることができる職員を目指します。

(名取市・東北工大職員・石井妃那乃さん・23歳)



まず現状を知る

震災に対し自分に何ができるかを考え、まず現状を知るべきだと思いました。塾では報道では分からないことを、視察と当事者の声

で学びます。受講生仲間や講師との交流を通じて自分なりの考えを持ち、次世代に「伝える力」を学びます。

(仙台市青葉区・東北管区行政評価局職員・橋本拓也さん・23歳)

メモ

311「伝える／備える」次世代塾は毎月第3土曜日を基本に開催する。受講無料。運営する311次世代塾推進協議会は人材育成活用で

協定を結ぶ東北福祉大、仙台市、河北新報社の3者を核に、東北、宮城教育、東北学院、東北工業、宮城学院女子、尚絅学院、仙台白百合女子の7大学と、学都仙台コ

ンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構が参加する。連絡先は協議会事務局の河北新報社防災・教育室＝メールjisedai@po.kahoku.co.jp